ガーナ国軍博物館における第二次世界大戦期の旧日本軍関連収蔵品にかんする調査報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学国際日本学部 公開日: 2020-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 溝辺, 泰雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21058

【資料紹介】

ガーナ国軍博物館における第二次世界大戦期の旧日本軍関連収蔵品にかんする調査報告

A Brief Report on the Survey of Japanese Army's Weapons and Belongings in the Ghana Armed Forces Museum Collection

溝辺泰雄
MIZOBE, Yasu'o

はじめに

本稿は、ガーナ共和国アシャンティ州クマシ市にあるガーナ国軍博物館（Ghana Armed Forces Museum）において筆者が複数回実施した、第二次世界大戦期の旧日本軍関連収蔵品調査[i]の概要報告である。同館に旧日本軍関連の収蔵品が存在していることは、これまで新聞報道やインターネットサイト、研究論考等で言及されてきている[ii]。しかし、その収蔵品の全容をまとめた報告は筆者が確認できている範囲では未だ公表されていない。

【図 1】ガーナ共和国クマシ市
［出所］d-maps.com の白地図に地名等を筆者が加筆

そこで筆者は 2008 年 9 月から 2012 年 3 月にかけて複数回に及ぶ同館での所蔵調査を実施し、2012 年 5 月に開催された日本アフリカ学会第 49 回学術大会において、同館が所蔵する旧日本軍関連の物品についての報告[iii]をおこなった。本稿は時間の関係から同報告において言及することができなかった内容を含む収蔵品調査の報告である。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第二次世界大戦期における旧日本軍と西アフリカに位置するガーナの関係を明確にするために、同大戦期のインド＝ビルマ戦線で旧日本軍と交戦したアフリカ兵部隊について概観する。その上で、同館に所蔵されていることが確認された全ての収蔵品を一覧に整理し、収蔵品に関するいくつかの検討を加えて、今後の調査・研究への課題を提示する。

I. 第二次世界大戦期に旧日本軍と交戦したアフリカ人兵士

西アフリカに位置するガーナの博物館に旧日本軍の武器や物品が展示されている背景には、第二次世界大戦期に、ガーナ（当時はイギリス領黄金海岸）出身の兵士たちが連合国軍の一員として旧日本軍との交戦に動員された事実が存在する。

1941年に東アフリカ戦線においてイタリアに対する優勢を確実なものとした連合国軍は、東アフリカ出身兵士を極東戦線に動員することを検討した。しかし、アフリカ大陸外の遠隔地にアフリカ人兵士を大規模に派遣した実績がなかったことや、東アフリカのイタリア軍に比べ軍事的に強力な日本軍への対応力が未知数だったこと、さらに東南アジアの気候・自然環境への適応力などが不明であったことから、アフリカ人兵士の動員には慎重論も存在していた[iv]。

そうした懸念はあったものの、1942年初頭に最初のアフリカ人兵士（彼らは東アフリカ出身の兵士たちだった）の1旅団を乗せた船がセイロン（現スリランカ）へ出航した。一方、この時点では西アフリカの兵士がアジアに派遣されることはなかった。なぜなら、当時西アフリカ兵の一部は東アフリカ戦線に従軍中で、その他の兵士たちはヴィシー政権下に置かれたフランス領西アフリカへの対応に動員されていたためである。セイロンに派遣された東アフリカの兵士たちも、同地に駐留し訓練を続けたものの、結局東南アジア戦線で戦うことはなく、一部はマダガスカルの侵攻作戦のために再派兵された[v]。

1942年末になると、ヨーロッパ戦線や北アフリカ戦線で連合国軍が有利な状況となったのにともない、アフリカ人兵士を大規模に極東戦線へ派遣することが可能になった。1943年初めに、フランス領西アフリカ植民地がヴィシー政権の支配下から解放されたことにより、西アフリカ遠征軍（West African Expeditionary Force）の2個師団のビルマ派遣が決定された。時を同じくして、セイロンに駐留する東アフリカ軍が師団規模まで拡大されることが決定され、新たに2個旅団が東アフリカから派遣されることになった。そして1943年半ばには、アフリカ人兵士の増強が本格化し、翌1944年初めに、第81西アフリカ師団がアフリカ人部隊のなかで初めて日本軍との交戦に動員されることになったのである[vi]。

ビルマ（現ミャンマー）における連合国軍の対日反攻作戦には少なくとも10万人以上の兵士が動員され、そのうちビルマの戦場で日本軍と直接交戦したアフリカ人の数は約5万と推定されている[vii]。ビルマの戦場に動員されたアフリカ人部隊は、3個師団（第81西アフリカ師団・第82西アフリカ師団・第11東アフリカ師団）と3個旅団（第3西アフリカ旅団・第28東アフリカ旅団・第22東アフリカ旅団）であった。

そのうち、西アフリカで編成された部隊は主にインパール作戦開始前後の戦闘に投入された。連合軍第15軍団に属した第81西アフリカ師団（のちに第82西アフリカ師団と任務交代）は、1943年12月から約6週間かけてチリンガ（現在のバングラディシュ南東部）からカラダン河谷の上流に沿ってシープ用の道路を切り開きながらジャングルを約120km行軍した[viii]。同師団は1944年1月中旬にダレトメに到達し、その後南下進撃中の1月20日に日本軍と遭遇し最初の戦闘が行われた[ix]。しかし、日本軍第28軍の木庭大佐が率いる支隊の反撃に遭い、1944年3月に

インドに撤退した[x]。そのほか、ウィンゲート少将指揮の空挺団に編入された第3西アフリカ旅団（この旅団はナイジェリア人から構成されていた）は、ビルマ中部に降下し後方撹乱作戦に従事した。

最初の作戦で撤退に追い込まれた第81西アフリカ師団は、雨季が開けた1944年後半に再度チリンガから行軍を開始した。この時の同師団は、車による輸送をやめ、全ての荷物を頭上で運ぶことで極めて高い機動力を発揮した。インパール作戦の失敗により撤退をはじめていた日本軍を追撃した同師団は、側面攻撃で通信線を切断して日本軍の孤立と混乱を誘い、1945年1月初めにキャウクトーで激しい戦闘をおこなった後、ニョーホウ（Nyohaung）を占領した。この作戦の成功は後のアキャブ（現シットウェー）陥落につながり、損耗も最初の作戦時の700名から約300名程度におさめることができた。この後、同師団は西アフリカからインドに派遣されていた第82西アフリカ師団と任務を交代した[xi]。

一方、東アフリカで編成された部隊は、エチオピアやマダガスカルでの作戦処理の後にアジアへ派遣されたため[xii]、ビルマに入ったのは西アフリカで編成された部隊よりも遅く、主にインパール作戦後の日本軍の追撃戦に投入された。1944年2月に東アフリカで結成され[xiii]、1944年9月以降ビルマ戦線に動員された第11東アフリカ師団は、日本軍第33師団の退路遮断という任務を与えられ、1944年末まで追撃戦をおこなった後、1944年12月インドに撤退した。第28、22東アフリカ旅団は、第11東アフリカ師団の交代部隊としてビルマ戦線に参加し、連合国軍第14軍団の前衛部隊として1945年終戦までビルマに残った。土井によると、「[東アフリカの師団、旅団が]ビルマ戦線に投入された時点では日本軍は、ほぼ全滅状態で組織的戦闘を行う力を残して」おらず、「従って、日本軍と東アフリカ軍が正面から堂々と対決する場面は一度もなく、満足な食糧もなく武器もなく命からがら必死で敗走する日本軍各部隊の追撃に終始して」いたとされる[xiv]。

本稿が取り上げるガーナ国軍博物館に収蔵されている旧日本軍関連の物品は、西アフリカから派遣された各師団及び旅団にイギリス領黄金海岸植民地から動員された、王立西アフリカ辺境軍（Royal West Africa Frontier Force）の黄金海岸連隊（The Gold Coast Regiment）の士官・兵士たちによって戦地より持ち帰られたものである。

II. ガーナ国軍博物館における旧日本軍関連収蔵品

今回調査を実施したガーナ国軍博物館[xv]は、ガーナがまだイギリスの植民地統治下にあった1952年に開館された博物館である。当時の名称は、植民地名にちなんで「黄金海岸連隊博物館（Museum for the Gold Coast Regiment）」であったが、1957年の独立を機に現在の館名に改称された。

もともとこの地には、植民地統治開始前の1820年に現地のアサンテ王国の皇太后が建設した城砦が存在しており、19世紀末にイギリス軍が同王国を侵攻した際、対英戦の拠点として激しい戦闘が繰り広げられた[xvi]。しかし、1900年にイギリス軍が占拠し、植民地統治下に置かれた後は植民地当局によって収用された。

その後、王立西アフリカ辺境軍の黄金海岸連隊の拠点として用いられていたことから、第二次

世界大戦後に同連隊の活動を記念する目的で博物館として転用されることになった。現在は植民地統治期のみならず独立後のガーナ国軍に関する展示もおこなわれている。

［出所］2011年8月筆者撮影

【写真1】国軍博物館の正面

筆者が調査を実施した時点で、展示室の数は9室あり、そのうち4室に旧日本軍関連の収蔵品が展示されていた。調査当時の同館館長によると、同館が保有する旧日本軍関連の収蔵品は、全て第二次世界大戦期に黄金海岸連隊の隊員たちがインド＝ビルマ戦線から持ち帰ったものとされ、展示室に陳列されているもの以外に旧日本軍関連の収蔵品は存在していない。筆者の調査によって確認された全ての収蔵品は以下の通りである。

【表1】国軍博物館における旧日本軍関連収蔵品

展示室[xvii]	収蔵品（整理番号）	点数	備考
A	日章旗（不明）	1	【写真2-1】説明文には'Captured by 7 G.C.R. from the 111th Regiment at Htabaw Arakan on 11th March 1944'とある。日の丸を中心に白地の部分に少なくとも90名以上の氏名と思われる漢字が記載されているが、生地の劣化のため判別できるのは一部のみ。
	日章旗（92.S.74）	1	【写真2-2】説明文には'Captured by 7th BN of the Gold Coast Regiment from the 111th Regiment at Htabaw, Kaladan Valley on 11th March 1944, during the Burma Campaign.'とある。右上には「祈武運長久」を読み取ることができ、下部には明確に氏名と判別できる漢字が記載されているが、もう1枚の日章旗と比べてこちらの方が劣化が激しく3分の1ほどの生地が消失している。なお、この日章旗には、「58」を意味すると思われる「LVIII」と記された赤（?）と黒（?）の縦縞の布も合わせて展示されている。
	日章旗のレプリカ（不明）	1	【写真2-3】'An Artist Impression of the Japanese Flag'とのタイトルが付され、製作日は2011年3月16日との記載がある。記されている文字様のデザインから【写真2-2】の日章旗を複製したものと判断できる。館長およびスタッフによると、このレプリカの制作は博物館側から依頼したとのこと。
	軍用手票（不明）	7	【写真2-4】説明文には'Japanese Currency issued during the occupation of Burma, 1942-45'とある。左上から左下にかけて10ルピー、1ルピー、5ルピー、右上から右下にかけて4分の1ルピー、10セント、50セント、2分の1ルピーと思われる表記が確認できる。

B	迫撃砲 (90.A.97)	1	説明文には 'Japanese Mortar : An 81mm weapon captured from the Japanese 54th Division during the Arakan Campaign, Burma 1944-1945. Presented by the 2nd West African Brigade.' とある。
	機関銃清掃器 (不明)	3	
	砲手用望遠鏡・潜望鏡 (90.1.4)	1	説明文には 'Japanese Artillery Telescope Periscope : Captured from the Japanese 54th Division at Letmauk, Arakan, by 3r Battalion of the Gold Coast Regiment on 7th Match 1945. Presented by the 3rd Battalion of the Gold Coast Regiment.' とある。
	拳銃 (90.A.93)	1	
	拳銃嚢(ホルスター) (90.S.18)	1	説明文には 'Japanese Pistol Holster : Captured by 7. Gold Coast Regiment from the Japanese 111th Regiment at Htabaw, Arakan, on 11th March 1944.'
C	軍用ヘルメット (90.S.16-S.16A)	2	【写真 2-5】説明文には 'Japanese Steel Helmet : Obtained by the 2nd West African Brigade during the Arakan Campaign, Burma 1944-45' とある。
	シャベル (不明)	2	【写真 2-5】
	機関銃及び弾倉 (90.A.118-121B; 90.A.121C; 90.A.122-122Q)	6	【写真 2-6】展示台には 'Japanese Nambu LMG 65mm Gun' と書かれたボードがあり、説明文には 'Guns Captured in Burma : These guns, together with the magazines were captured in Burma by the 2nd & 5th West African Brigades 1944-45.' と記されている。
	地雷除去器 (90.A.110; 90.A.116; その他不明)	4	
	ライフル銃 (A90, 91, 92, 92A, 92B)	11	【写真2-7】説明文には'Japanese 44 Long Rifles : Standard Japanese army rifles used in the 1941-45 World War. Captured during the Burma campaign by the 81st and 82nd West African Divisions.' とある。
D	軍刀及び鞘 (90.A.108-108C)	7	【写真 2-8】説明文には 'Japanese Bayonets: Captured by 2nd and 5th (W.A.) Brigades during the Burma Campaign 1943-45.' とある。

2-1. 日章旗 1

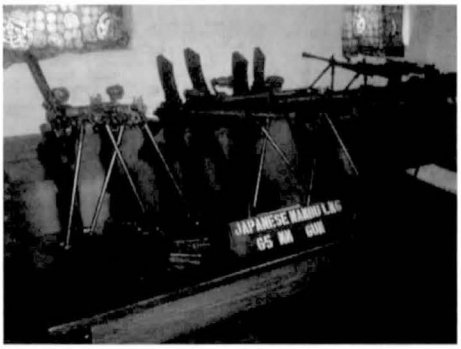
2-2. 日章旗 2 (実際の展示とは角度を変えて掲載)

2-3. 新たに製作された日章旗のレプリカ（右）

2-4. 軍用手票

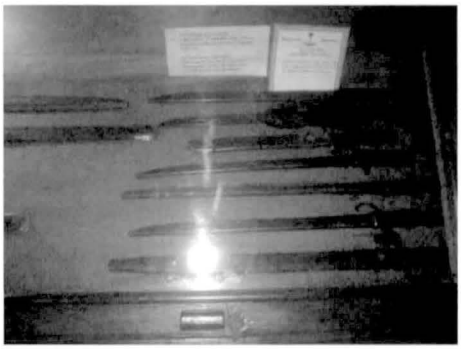
2-5. ヘルメットとシャベル

2-6.「南部式機関銃」とされる機関銃



2-7.「四四式騎銃」とされるライフル銃

2-8. 軍刀（短剣）



【写真2】旧日本軍関連の主な収蔵品（筆者撮影）[xviii]

以上の通り、筆者は一連の調査において、日章旗のレプリカを含めて計49点の旧日本軍関連の収蔵品の存在を確認した。そのなかでも氏名の寄せ書きと思われる手書きの漢字が記された日章旗について、短く検討を加えたい[xix]。

【表1】の備考欄に記載した通り、多くの収蔵品には同館による説明文（キャプション）が付されている【写真3】。その説明文によると、【写真2-1】と【写真2-2】の日章旗はいずれも1944年3月11日に黄金海岸連隊第7大隊が旧日本軍第111連隊から獲得したものとされている。先に触れた通り、連合軍（イギリス軍）がビルマ西部の前線に黄金海岸連隊の兵士たちを含む第

81西アフリカ師団を投入したのは1944年の初めであった。一方、旧日本軍の第111連隊は第28軍の第54師団に属していた部隊で、1944年2月に第二次アキャブ作戦に参加したものの同年4月には劣勢に置かれて退却をはじめ、その後約1年間に渡って東方への撤退戦を強いられ、多数の兵士が死傷した[xx]。そのため、状況としては説明文の内容に矛盾はないように思われる。

【写真3】収蔵品に付されたキャプション（筆者撮影）

しかし、2枚目の日章旗【写真2-2】には「58」を意味すると思われる「LVIII」と記された縦縞の布も合わせて展示されている。この布が日章旗と合わせて確保されたのかどうかを確認する手立ては現在のところ存在しない。もしこの布が日章旗を持参したのと同じ部隊が日本から持参したもので、その布にある記号が連隊名を意味する軍隊符号であったのだとすると、この日章旗を保有していた部隊はビルマ方面軍第31師団に属していた歩兵第58連隊であったとも考えられる。確かに同連隊は1943年からビルマ北西部に動員され、1944年3月12日に先遣隊がチンドウィン河を越え、同月15日からは本隊がインド北東部のコヒマを目指してインパール作戦に参加している[xxi]。しかしこの日章旗を奪取したとする3月11日には、同連隊はビルマ北西部でまだ作戦参加の準備中であり、ビルマ南西部の戦線に動員されていた黄金海岸連隊（彼らが交戦した日本軍の部隊は第28軍であった）と交戦していたかどうかは不明である。

まとめにかえて

以上が、筆者がこれまでの調査で確認することができた、ガーナ国軍博物館における旧日本軍関連収蔵品の概要である。これらはあくまで筆者が同館において収集した情報に基づくものである。筆者によるこれまでの調査によると、同館には収蔵品リストは存在せず、収蔵品の確認に用いることができる情報は、同館館長及びスタッフによる情報提供と展示品および展示品に付された説明文のみであった。【写真3】の例が示すように、その説明文が印刷された台紙の上部には王立西アフリカ辺境軍（RWAFF）の紋章と'Regimental Museum'との文字が刻印されている。このことは、これらの説明文が独立前の「黄金海岸連隊博物館」時代に作成された可能性を示唆しているとも考えられるが、その説明文の根拠となる情報はまだ確認できていない。それゆえ、それぞれの収蔵品の属性については、それらが同館に収蔵されるに至った経緯を示す資料の調査や軍事品の専門家による収蔵品の鑑定などを経ない限り、断定的な判断を下すことはできない。

これまでに筆者は同館が設立された経緯を調べるためにガーナ国立公文書館アクラ本館およびクマシ分館などガーナ国内における資料調査も実施してきたが、これまでのところ手がかりになる情報は得られていない。同館が設立されたのはまだガーナがイギリスの植民地統治下に置か

れていた時期であるため、イギリス本国の資料館・文書館に何らかの情報が遺されている可能性もある。そしていうまでもなく、これらの収蔵品の元々の所有者たちが暮らしていた日本での調査も早急に進めていかねばならない。これらの収蔵品は、植民地統治下に置かれたアフリカのイギリス領諸植民地から数万の兵士たちが東南アジアのビルマに動員され、日本人兵士たちと直接交戦せざるを得なかったという悲劇的史実を伝え遺す貴重な歴史資料である[xxii]。それゆえに、これらの収蔵品のより正確な属性を検証し、その資料としての役割を永続的に保つべく努力することが求められる。

註

i 筆者はガーナに初めて訪問した2003年1月以降、少なくとも5回以上同館を訪問しているが、収蔵品の調査を目的とした訪問は2008年9月11日と2011年9月19日、2012年3月21日の3日間である。これらの調査は、同館スタッフによる協力に加え、2007-08年度科学研究費補助金・特別研究員奨励費「アフリカ独自の近代化・自立的発展論に関する歴史的研究：植民地初期ガーナの事例から」（研究課題番号：07J01314）及び2009-10年度科学研究費補助金・研究活動スタート支援「英領西アフリカ現地新聞の分析を通した、第二次世界大戦期の日本アフリカ交渉史研究」（同：21810028）、2011-13年度科学研究費補助金・若手研究（B）「『アフリカから見た第二次世界大戦期の日本』研究の構築に向けた基礎的研究」（同：23710307）による助成により実現した。また本稿の作成にあたっては、匿名の査読者にいくつかの貴重な指摘をいただいた。ここに記して謝意を表したい。なお、本稿の内容は著者自らの見解等に基づくものであり、所属研究機関、資金配分機関及び国の見解等を反映するものではない。

ii 産経新聞（東京版朝刊）「ガーナで「日章旗」発見：インパール作戦“従軍”、返還へ持ち主捜し」2006年8月11日；波野日記「波野四方のガーナ日記9」2007年9月16日投稿 https://blog.goo.ne.jp/hwgps/e/13c2a99faf14a4c3f4cfa355ef449543（最終閲覧日：2019年9月19日）；清野栄一「歴史の狭間、横たわる謎：ガーナに渡った日章旗と銃剣」朝日新聞（夕刊）、2010年9月10日；古川哲史「W・E・B・デュボイスの生涯と時代：日本訪問（1936年）に関わる試論」『大谷大学研究年報』第69号、2017年、24, 31-32及び44頁。

iii 溝辺泰雄「第二次世界大戦期の日本アフリカ交渉史研究：英語圏西アフリカ（ガーナ）に現存する旧日本軍の「戦利品」に関する調査の予備的報告」日本アフリカ学会第49回学術大会（於：国立民族学博物館）・口頭発表、2012年5月27日、https://african-studies.com/j/convention/2012_minpaku/

iv Sabben-Clare (1945), pp. 151-152.

v Sabben-Clare (1945), pp. 151-152.

vi Sabben-Clare (1945), pp. 151-152.

vii 土井茂則（1982）、90頁。

viii 日本軍は当初、第81西アフリカ師団のこの動きを把握していなかったとされる。防衛庁防衛研修所戦史室（1968）、312頁。

ix Sabben-Calre (1945), p. 151; 防衛庁防衛研修所戦史室（1968）、345頁。

x 防衛庁防衛研修所戦史室（1968）、341-344頁。

xi Sabben-Clare (1945), p. 154.

xii Page (2011), p. 133.

xiii Page (2011), p. 141.

xiv 土井（1982）、91頁。

xv 以下の内容は、2011年9月19日と2012年3月21日に実施した調査の際に同館のトゥウェネボア＝コドゥア館長（当時）と同館スタッフへの聞き取りおよび同館の掲示に加え、次のウェブサイトの情報に基づいている：Ghana Museums & Monuments Board, 'Kumasi Fort and Military Museum' at https://www.ghanamuseums.org/kumasi-fort-millitary-museum.php（最終閲覧日：2019年9月16日）

xvi 19世紀末のアサンテ王国とイギリス軍との戦いについては、次の拙稿を参照。溝辺泰雄「皇太后が率いた反植民地戦争：アサンテ王国の皇太后ヤァ＝アサンテワァと黄金の床几」高根努、山田肖子編『ガーナを知るための47章』明石書店、2011年、pp. 235 - 239。

xvii 展示室の名称（A・B・C）は筆者が整理のために用いたものであり、実際の展示室名ではない。また、

それぞれの展示室には旧日本軍関連の収蔵品以外の展示物も陳列されているが、本稿ではそれらは記載していない。

xviii 写真 1-2 および 4-8 は 2008 年 9 月撮影、3 は 2012 年 3 月撮影。

xix その他の収蔵品も含めた詳細な検討は、今後予定している再調査で得られた情報も踏まえて、稿を改めておこなう予定である。

xx 高砂市史編さん専門委員会編 (2014), 523-524 頁。

xxi 高田歩兵第五十八聯隊史編纂委員会 (1983), 15、611、655 頁。

xxii ガーナ国軍博物館の当時の館長であったトゥウェネボア＝コドゥア氏は、筆者とのインタビューのなかで、「旧日本軍関連の収蔵品は、アフリカ人兵士の力なくして、イギリスが日本軍を破ることはできなかったことを示す存在である」と述べた。この言葉が示す通り、これらの収蔵品は日本の第二次世界大戦史にとって極めて示唆的な資料であることに加えて、ガーナをはじめとするアフリカの人々にとっても、彼らの植民地史・第二次世界大戦史の重要な歴史資料であることを我々は認識する必要があるだろう。

参考文献

高砂市史編さん専門委員会編 (2014)『高砂市史第三巻：通史編 近現代』高砂市。

高田歩兵第五十八聯隊史編纂委員会 (1983)『高田歩兵第五十八聯隊史』歩五八会本部。

土井茂則 (1982)「日本・東アフリカ関係史の一考察」『アフリカ研究』第 21 号、90-96 頁。

防衛庁防衛研修所戦史室 (1968)『インパール作戦：ビルマの防衛 (戦史叢書)』朝雲新聞社。

Page, Malcolm. (2011) *King's African Rifles: A History*, Barnsley: Pen & Sword Books.

Sabben-Clare, E. E. (1945) 'African Troops in Asia', *African Affairs*, 44(177), pp. 151-157.

ABSTRACT

A Brief Report on the Survey of Japanese Army's Weapons and Belongings in the Ghana Armed Forces Museum Collection

Yasu'o MIZOBE, PhD

This brief report surveys the Imperial Japanese Army's weapons and belongings in the Ghana Armed Forces Museum in Kumasi, a collection that comprises 49 items including two Japanese Flags, a mortar, rifles, and bayonets captured by the Gold Coast Regiments in the India-Burma Theatre during World War II. These items are valuable reminders of the unintended encounter between the Africans and Japanese in battlefields in south-eastern Asia during World War II. However, the descriptions on explanatory captions attached to these items have not been examined through objective evidence; therefore, additional archival surveys in Ghana, Britain and Japan and their authentication by experts in items of the Japanese Imperial Army are necessary.